

① 渋沢栄一と温故学会

版木は渋沢栄一らで温故学会へ



社団法人「温故学会」

明治四十二年末塙検校の偉業を顕彰
塙 忠雄・渋沢栄一・井上通泰・芳賀矢一

温故学会資金募集の趣意書

「先生は埼玉とは深き縁故も有之候間、
小生も微力乍ら金貳千円寄付致置候
次第に付貴台に於ても御賛成被下」

〔埼玉の先人渋沢栄一・荻塚一三郎・金子吉衛〕



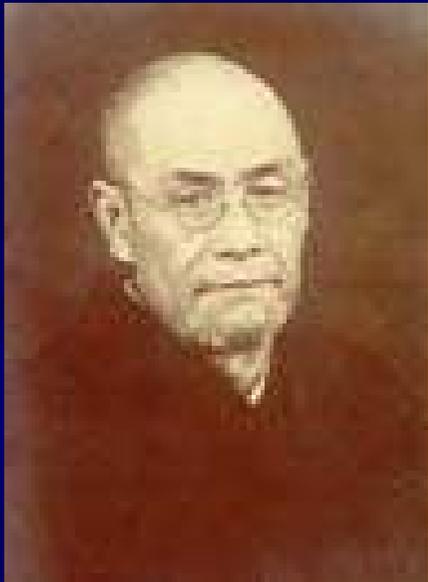


温故学会開館式の関係者 昭和二年

明治四二年（一九〇九）・国文学者で医者としても知られた井上通泰は、この年の夏、麴町区竹平町の文部省に通っていたが、ある日建物の裏手に古い土蔵があるのに気づいた。人力車夫が酷暑を避けて軒下に寝ころんでいたが、なにしろその土蔵たるや今にも倒壊しそうなしろものである。こんな危ないものを、と思った彼は傍らの役人に向いた「何が入っているのか」と尋ねてみた。役人はこともなげに答えた。「ああ、あれは『群書類従』の版木が入っているんですよ」井上は仰天した。

彼は早速、このことを保己一の曾孫忠雄に知らせた。父祖の偉業顕彰に志を抱いていた忠雄は、すでに洪沢栄一ほか名士を賛助会員とした温故会を組織していたが、版木発見の報に雀躍し、所有者である帝国大学に《下付》を申請した。

忠雄は四谷愛染院の境内に煉瓦造りの倉庫を建て、大正一二年（一九二三）に版木を下付された。（入沢由梨子）



埴忠雄